様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　4 月　5 日現在

機関番号：25301
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～　2012
課題番号：22592405

研究課題名（和文）医療事故看護当事者へのリスク回避の分析サポートと安全学習尺度の検証

研究課題名（英文）　The support to hospital nurse for escape from malpractice and the test of a Medical Safety Leaning Scale

研究代表者
横手　芳惠（YOKOTE YOSHIE）
岡山県立大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：８０２００９０５

研究成果の概要（和文）：看護職の医療事故の経験による安全学習とサポートの関連についての検討：本研究は、過去に医療事故当事者の経験を持つ看護職を対象として、医療事故の経験による安全学習を促進するサポートの関連について検討することを目的とする。6,460 人の看護職を対象として郵送調査を実施した。医療事故の経験による安全学習の測定には、林らの「医療事故当事者（看護職）の安全学習尺度（Medical Safety Learning Scale: MSLS）」を使用した。サポート内容 11 項目でそれぞれ受けたかどうか（有無）から MSLS 得点差を t 検定で検証し、さらに MSLS の 6 下位尺度についてサポートの効果量を検証した。有効回答数は 2,523 人であった。サポート有無による MSLS 得点の t 検定では、「勤務変更、もしくは休暇をくれた」を除くサポート項目で有意差を認めた。効果量の測定では、「必要な知識・技術を教えてくれた」のサポートで〔事故防止スキルの学習〕（σ=0.63）の安全学習に対して最も効果量が大きかった。安全学習にはサポートが関連し、看護職への適切なサポート内容が効果的な安全学習に繋がることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：A study on the influence of support of hospital nurses on medical safety-related learning on the basis of past experiences of medical malpractice.

Purpose: To examine the influence of support received by hospital nurses, who had involvement in medical malpractice, in promoting medical safety-related learning on the basis of past experiences of medical accidents.

Methods: A mail survey was conducted on 6,460 hospital nurses. We used “Medical Safety Learning Scale: MSLS” by Hayashi et al. to measure medical safety-related learning on the basis of previous experiences of medical accidents. Using the *t*-test, MSLS scores were calculated on the basis of whether each of the 11 support items were received or not (yes/no), and the effectiveness of support in relation to the 6 subscales of the MSLS was analyzed.

Results: There were 2,523 valid responses. With regard to MSLS scores on support items on the basis of whether or not these items were received, a significant difference in medical safety-related learning was observed for all items except “work transfer or receiving leave.” The support items “skills and knowledge required were taught” and “learning skills to prevent malpractice” were most effective (σ = 0.63).

Conclusion: Support was associated with promotion of medical safety-related learning, and appropriate support content was linked to effective learning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学
キーワード：医療事故・安全学習尺度・リスク回避分析・当事者サポート

１．研究開始当初の背景

医療事故の発生は大きな社会問題の１つとなっている。公益財団法人医療機能評価機構による 2011 年の医療事故報告件数は 2483 件で過去最多の前年度を上回り、報告義務対象医療機関の報告意識の定着結果とはいえ増加傾向にある。その当事者報告数は看護職が全医療職種で最も多く、複雑高度化する医療現場において、多様な要因が絡むエラー連鎖の最終段階で患者に最も近い当事者として直面していると考えられる。一方、看護職の離職の多くが医療事故への不安を理由としていたことが報告されている。研究者らは医療事故を経験した看護職への面接調査から、当事者の事故体験による心理的影響とそのサポートの必要性から、先の研究（科学研究費補助基盤研究Ｃ課題番号１９５９２４６３「医療事故体験看護師への当事者サポートとその効果測定尺度の開発研究」）をおこなった。これは、近年ストレス体験や困難な状況が精神的な成長の機会となることが報告されているが、研究者らは医療安全に関する問題解決学習から看護専門職としての成長に至る意識・行動の肯定的変化を学習の視点で捉え、医療事故の経験による安全学習として尺度（MSLS）開発したものである。

２．研究の目的

本研究は、医療事故の経験による安全学習はサポートにより促進されると仮定し、開発した安全学習尺度（MSLS）を用いて、安全学習とサポートの関連について検討することを目的とした。

３．研究の方法

全国150床以上の病院施設から6地域病床数5区分とし層化無作為抽出による450施設の管理者に調査協力の依頼を行った。了解のあった127施設を対象に看護職への調査票配布を依頼し、回収は秘密保持の目的から」配布した返信用封筒で直接回答者の投函を求めた。調査期間は 2010 年 12 月～2011 年 3 月であった。

調査内容の構成は、基本属性（年齢、経験年、性別、職位）、事故概要（事故発生年、事故時経験年、患者影響度、事故内容、事故原因、事故時所属部署、事故時所属経験年）、サポートについて（内容、期間、提供者）、「医療事故当事者（看護職）の安全学習尺度（Medical Safety Learning Scale: 以下 MSLS と記す）」22 項目。MSLS は＜事故防止スキルの学習＞3 項目、＜看護判断力の獲得＞4 項目、＜自己モニタリングの習得＞3 項目、＜安全態度の学習＞５項目、＜組織安全の学習＞３項目、＜看護価値の獲得＞4 項目の６下位尺度 22 項目で構成する尺度で、信頼性・妥当性は先の研究で検証されている。各項目は５段階リカート法で評価する。分析方法は、サポート内容 11 項目からサポート有無別に MSLS 平均得点の差をｔ検定で検討（基準ｐ値が 0.05 未満（ｐ＜0.05）で有意差ありとした。さらに、安全学習へサポートが影響を及ぼす程度を表す統計指標として効果量（effect size:ES）を用い検討した。統計解析には統計ソフト SPSS17.0J for windows を使用した。

尚、本研究は岡山県立大学倫理委員会の承認を得た。

４．研究成果

調査票は 3610 人から回答を得（回収率 55.9%）、全回答項目で欠損値のない 2523 人を分析対象とした。

対象者の基本属性は平均 37.3 歳で 40 歳以上が最も多く 990 名、次いで 30～39 歳 850 人、20～29 歳 683 名であった。経験年は平均 13.4 年で、1 年未満 83 名と最も少なく、10 年目以上は 58.5%で最も多かった。患者影響度は「影響なかった」43.9%が最も多く、「治療を要した」17.8%、「後遺症が残った」1.6%など何らかの影響のあった医療事故は 48.5%であった。内容は、与薬や処方など「薬剤」関連が 1213 名と最も多く、「療養上の世

話」524 名であった。原因では「確認を怠った」1603 名、「勤務状況が繁忙だった」631 名、「観察を怠った」627 名であった。

受けたサポートは総数平均 2.7 項目の回答で、1 項目以上受けた 89.9%、全く受けていない 10.1%であった。受けたサポート内容は、「原因追求を一緒にしてくれた」48.5%が最も多く、「問題点を指摘してくれた」45.5%、「励ましの言葉をかけてくれた」41.8%、「話を静かに聞いてくれた（傾聴）」37.9%、と続いた。反対に、受けた項目の少なかったのは「勤務変更、もしくは休暇をくれた」1.3%、「周囲の批判・非難に対して擁護してくれた」6.1%であった（複数回答）。サポート期間は「事故直後のみ」46.1%が最も多く、「事故後２～３日まで」20.6%、「事故翌日まで」が 12.0%と続いた。サポート提供者は「職場の先輩同僚」64.4%、「直接の上司（師長、主任など）63.8%など職場同業者が多かった（複数回答）。

患者影響度別の MSLS 得点間について検討したところ群間における差は認められなかった。得点が高いほど安全学習をしていることを示す MSLS の平均得点は 84.2 点（範囲 22～110）、22 項目の平均得点は 3.8 点であった。

「かなりそう思う」の割合が高かった項目は、「事故後は、医療事故に関心を持つようになった」62.4% 、「事故後は、報告を確実にするようにした」51.3% であった。反対に、「全くそう思わない」の割合が高かったのは「事故後は、そのミス（事故）に関連した看護技術を練習した」9.8%、「事故後は、事故防止の意識があがった」8.4%、「事故後は、自分の心理状態を分析できるようになった」7.7% であった。

t 検定と効果量（δ値）を検討した結果、サポート 11 項目は、受けた人のほうが受けていない人より MSLS 得点が高くその差は平均 4.7 点（範囲 3.7～6.8）であった。サポート有無と MSLS 得点の差を t 検定したところ「勤務変更、もしくは休暇をくれた」を除く１０項目で有意差を認めた（p＜0.001）。サンプル差に依存しない効果量と MSLS6 下位尺度で検討した結果、「中くらい」の効果量（δ＝0.50 以上）のサポートは「必要な知識・技術を教えてくれた（事故防止スキルの学習）」で、最も高い効果量を示した。また、「周囲の批判・非難に対して擁護してくれた」は最も受けた人が少なかったが自己モニタリングの習得（δ＝0.44）、組織安全の学習（（δ＝0.44）、看護価値の獲得（δ＝0.40）の安全学習に対して「中くらい」の効果量が認められた。このサポートは他の尺度項目間でも大きな差がなかった。「小さい」効果量を示した項目をみると、「事故処理を一緒にしてくれた」は看護判断力の獲得（δ＝0.16）、自己モニタリングの習得（δ＝0.17）、安全態度の学習（δ＝0.19）と、効果量が小さかった。また、「自分の代わりに、患者・家族もしくは医師に説明してくれた」は看護判断力、自己モニタリング、看護価値獲得の下位尺度項目に効果量が小さかった。

以上の結果を考察すると、サポートを受けた人の方が安全学習得点が高く、関連性が認められた。効果量の大きい（δ＝0.80 以上）項目は特定できなかったが、「周囲の批判・非難に対して擁護してくれた」は６下位尺度で「中くらい」の効果を示し、これは自己の価値や能力喪失感への精神的サポートと考えられ、自責感を抱きがちな当事者への危機状況をサポートすることの安全学習への影響を示したと考えられた。反対に、「事故処理を一緒にしてくれた」「自分の代わりに、患者・家族もしくは医師に説明してくれた」は当事者を、その事故と退治することからガードしてしまう可能性があり、安全学習に結びつかないサポートなっていたことが示唆された。

今回の成果は医療事故後のサポートが心理的ダメージの軽減ばかりではなく、安全学習にも寄与すると思われた。本研究では、横断的研究による限界があった。

５　主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①林千加子、鈴木千絵子、山本奈奈、横手芳恵「医療事故当事者（看護職）の安全学習尺度の開発」医療の質・安全学会誌、5(3),201-212,2010

②林千加子、鈴木千絵子、横手芳恵、森本寛訓「看護職の医療事故の経験による安全学習とサポートとの関連」岡山県立大学保健福祉学部紀要、19(1),9-18,2012

③林千加子、鈴木千絵子、横手芳恵「医療事故当事者（看護職者）の事故経験による安全学習尺度（Medical Safety Leaning Scale）：交差妥当性と心理的ダメージの経時的変化との関連」医療の質・安全学会誌、8(1),9-22,2013

〔学会発表〕（計２件）

①林千加子、鈴木千絵子、横手芳恵「医療事故当事者（看護職）の安全学習尺度の検証」医療の質・安全学会第 6 回学術集会、2012 年 11 月 19 日、東京

②平本美津恵、横手芳恵「医療事故体験の回想によるリスク回避の気づきの構造」医療の質・安全学会第７回学術集会、2013 年 11 月 23 日、埼玉

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

○取得状況（計　０件）

６．研究組織
(1)研究代表者
横手　芳惠（YOKOTE YOSHIE）
岡山県立大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：８０２００９０５

(2)研究分担者
鈴木　千絵子（SUZUKI CHIEKO）
岡山県立大学・保健福祉学部・助教
研究者番号：３０５６３７９６

林　千加子（HAYASHI CHIKAKO）
川崎医療短期大学・看護学部・講師
研究者番号：５０３４２２９１

(3)連携研究者
なし